

2023年5月28日聖霊降臨日

エゼキエル書 11 章 17—20 節

使徒言行録 2 章 1—11 節

ヨハネによる福音書 20 章 19-23 節

庭のばらが色とりどりに咲いて大変にきれいです。7色はあると思います。ちょうどよい気候の本日は、聖霊降臨日・ペンテコステです。聖霊降臨日・ペンテコステは、降誕日・クリスマス、復活日・イースターと並んで教会の三大祝日の一つですが、わたしたちにとっては、教会の創立記念日でもあります。21世紀中は、その年の下二桁の数に111年を足すのですが、今年は創立134年です。

本日から、礼拝受付の場所も2019年までの二階に戻し、礼拝後は、ミニバザーやバーベキューを行います。コロナ禍が完全終了したわけではありませんが、まじわりのひとときを持ちたいと思います。また、本日から使用する聖書を、「新共同訳」から「聖書協会共同訳」にいたします。創立記念の本日から、心を新たに歩み始めたいと思います。

さて、教会歴で本日が聖霊降臨日として位置づけられるのは、使徒言行録の「**五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると**」という記述に基づいています（使徒2:1）。この中の「**五旬祭**」（「50番目の」という意味）という言葉が「ペンテコステ」です。ただし、この日数は、過ぎ越しの祭りの後の50日目（過ぎ越しの祭りの二日目から数えて7週と1日）に行う、「七週の祭り（シャブオット）」というユダヤ教の祭りと呼応しています。「過ぎ越しの祭り」、「仮庵の祭り」と並ぶ、ユダヤ教三大祭りの一つ、初夏に行われる収穫祭です。ルカ福音書～使徒言行録によれば、イエス様は十字架にかかり復活され、40日間、使徒たちと共に過ごされた後、天に昇られました。その10日後の「七週の祭り（シャブオット）」の日に、一同たちが集まっていると聖霊が降りました。すなわち、人々は、収穫祭として集まっていたのですが、その日の集まる意味が変わりました。つまり、主なる神様が与えられたカナンの地で、春から初夏の収穫を祝う日ではなく、イエス様を通して主なる神様を信じる人々の、新しい歩みが始まる日となったのです。

これらのことから、聖霊降臨日は、教会の誕生日と言われます。それは、しかし、その日に初めて聖霊が地上に現れたという意味ではありません。今日のエゼキエル書で「**彼らの内に新しい霊を授ける**」（エゼ11:19）という表現がある通り、『聖書（旧約）』に主なる神様の働きの一つとして、霊はいろいろな個所で登場しています。

各福音書よりも古いパウロの手紙には、使徒たちに対する聖霊降臨について記述はありませんが、「**五旬祭**」という言葉は出てきます（1コリ16:8）。また、パウロは、霊の働きがすでにあるものと前提しています。すなわち、霊を肉と対比される事柄として用いるのです。霊的な事柄とは、主なる神様から発生した神

様に関わる事柄、肉的な事柄とは、人間から発生する人間に関わる事柄です。そして、パウロは、肉の思いではなく霊的な交わりの中で生きることが、キリスト者にとって大切だと主張します。

ルカ福音書・使徒言行録よりも前に書かれたと思われる、マルコ福音書には、使徒たちに対する聖霊降臨に関する記述や示唆はありません。そもそもマルコ福音書は、復活されたイエス様の姿を描いていません。ただし、霊に関して、イエス様が洗礼を受けられたとき、「そしてすぐ、水から上がっているとき、天が裂けて、霊が鳩のようにご自分の中へ降って来るのを御覧になった」（マルコ 1：10）とあります。つまり、以前からある霊が、洗礼を受けたときはじめてイエス様に降ったような描き方をしています。

本日の福音書であるヨハネ福音書は、ルカ福音書・使徒言行録よりも後に書かれたのですが、同じように、イエス様が洗礼を受けられたとき、洗礼を授けたヨハネが「私は、霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」（ヨハネ 1：32）と記述しています。しかし、14章では、「私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください」（ヨハネ 14：16）とあり、聖霊は「弁護者」と呼ばれています。しかし、本日の聖書日課に「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』（ヨハネ 20：22）とある通り、イエス様が復活後すぐ使徒たちに聖霊を吹きかけています。使徒たちへの聖霊降臨の出来事は、使徒言行録の記述とは異なっているのです。

これらの『聖書』の記述の中で、どれが真実かというような問いは、正しい問いではありません。『聖書』全体が示すのは、聖霊という主なる神様の働きが、昔もあり、イエス様の時代もあり、今もあり、そしてこれからもあると事柄に他ならないからです。それゆえ教会は、最終的に、その事柄を「父と子と聖霊」は一体であるという三位一体の教えにまとめました。つまり、主なる神様によるイエス様を通した聖霊に満ちた救いの出来事を、人間が理解しようとする、父と子と聖霊は一体であるという三位一体的に理解するしかないということです。

聖霊降臨の出来事は、使徒言行録にある物語が有名であり、また印象的であることは確かです。しかし、聖霊が降ったということは、三位一体的に考えることが大切なのです。すなわち、天地創造の初めから、今も、そしてこれからも働かれる神様の業の一つとして、聖霊にかかわる出来事を考えることが大切なのです。

130年の時を超えるわたしたちの教会は、聖霊によって誕生し、守られ、導かれてきました。ここからもそうです。それは世界中の他の教会も同じです。また、わたしたち一人ひとりも、主なる神様の息である聖霊を通して命を与えられ、「地上の命の道」を歩みますが、死があっても特権にある通り「永遠の命の道」をいざれ歩みます。聖霊によって生かされているからこそ、その聖霊の最も大切な働きであり、永遠の命を裏付ける主なる神様の愛を、世界に伝えていきたいと思えます。本日は、礼拝後にまじわりのひとときを持ちますが、これからも教会の礼拝と交わりを通して、その愛を示していきたいと思えます。